

川崎病急性期薬物療法の効果判定に関する研究

東京女子医大小児科 草 川 三 治

川崎病の急性期の治療方法は、今日、アスピリンが広く用いられている。このアスピリン療法は、これまで2、3の施設の成績と川崎病冠動脈後遺症に関する全国調査成績より得られた、冠動脈瘤後遺症と急性期薬物療法の検討成績が、根拠になっている。しかし、これらの成績の全て、retrospective な方法で行ったものであり、国際的にも当然のことながら国内的にも、これらの成績だけでは不充分である。このような現状より、急性期の薬物療法の効果判定を正確に行うことが急務になっている。そこで、2年計画で、以下のような条件で prospective に全国的に本研究を行うことにした。

- 1) 3種の薬物（アスピリン、フロベン、プレドニン）を用い、使用量、使用期間を決定した。
- 2) 使用する対象の年齢、開始病日を一定化した。
- 3) コントローラーを置き、対象条件に合う症例が入院した場合、コントローラーに報告し、使用薬剤を決定してもらい、使用した。
- 4) 患者の臨床症状、検査成績を記録するための統一した記録表を作った。

昭和56年12月末現在で、全国7施設の協力により110例の症例が本研究対象として、コントローラーの所に集められている。前述の3種の薬剤の効果判定をするためには、少なくとも200例の症例が必要であり、本年度は具体的成績は出せないが、1年間で100例以上の症例が集まり、研究は順調に進んでいる。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



川崎病の急性期の治療方法は、今日、アスピリンが広く用いられている。このアスピリン療法は、これまで 2,3 の施設の成績と川崎病冠動脈後遺症に関する全国調査成績より得られた、冠動脈瘤後遺症と急性期薬物療法の検討成績が、根拠になっている。しかし、これらの成績の全て、retrospective な方法で行ったものであり、国際的にも当然のことながら国内的にも、これらの成績だけでは不十分である。このような現状より、急性期の薬物療法の効果判定を正確に行うことが急務になっている。そこで、2 年計画で、以下のような条件で prospective に全国的に本研究を行うことにした。